韓学韓用克韓観光立志譚

前川恵司

国交正常化して以来、韓国の日本とのつきあいの基本姿勢は「反日」。ここに時々のスローガンがかぶさった。90年代初めまでは、憎らしくても、日本から学ぶべきことは学び、国の発展に結びつけようとの「学日」が流行った。トヨタの看板方式とかいう、大事だけでなく、こまごましたところにまで、「学日」が幅を利かせた。

私の勤めていた日本の新聞社のソウル支局に、韓国人の若い助手2人がいた。窓の外はけだるいどんよりとした日和の昼過ぎ、年かさの方の助手が、

「おい、資料は積み重ねちゃだめだ」

と言って、向かい合って座っていた助手をとがめたことがあった。聞き耳を立てていると、年かさの彼はこう説教を続けたのだ。

「日本人はいつも立てて並べている。確かに重ね置きだと、急に探すときに見つからないからな。ウリナラ（俺の国）では、昔から本は重ねていたが…。日本人から学ぶべきことはまだまだあるよ」

90年代中盤になると、「克日」になった。日本を批判するだけではだめだ。日本に打ち勝つ底力をつけようということだった。

それが21世紀になると、確か「用日」へと変わった。日本を利用する、活用するという「実利第一主義」で、となったわけだが、それがいつの間にか、「攻日」一本槍になったわけだ。それはそれとして、それでは逆に、日本から韓国に学ぶこと、つまり「学韓」すべきことは何かと考えて見た。

するとまず浮かんだのが、観光立国・韓国のひたむきさだ。どんな風にだろうか。

ちなみに２０１４年に韓国を訪れた観光客は１４００万人を突破していて、日本をわずかだが超えている。ここにきて、中国人爆買い訪日観光客が急増し、韓国をあわてさせているものの、日本人観光客ビジネスが仕事の韓国女性にいわせれば、

「北海道や九州、富士山、京都、各地の温泉、それに原宿のようなユニークな街がたくさんある日本なら、韓国の3倍ぐらいのお客さんが来ても不思議じゃない」

そうだ。それなのに、どうしてそうならないのか。思い返すと、最近でこそ、東京のデパートなどでも免税サービスをするようになったが、ソウルではとっくの昔からそうだった。60年代のソウルには、歴史的な名門ホテルの一角に、外国人専用の「ドルショップ」があった。

先々号の本欄で日韓請求権資金による金額、5億ドルを「5億円」と誤記し、皆様にご迷惑をおかけし申し訳なかったが、世界の最貧国から脱出するためには、その資金だけでなく、もっと多くのドルが欲しかった。

その執念が、赤いビロードを広げた上に、スコッチやダンヒルのタバコ、チョコレートなどをただ並べただけの「ドルショップ」には籠っていた。東京にも米軍占領時代には外貨ショップはあったが、それはいつのまにか消えたそうだ。日本は輸出だけで十分に外貨を稼げたからだろう。

それにしても究極の平和産業である「観光」

とは真逆の、戦火を交え、またいつ火を吹くか分からない分断国家。そのうえ、観光資源といえるものはないも同然が、その頃の韓国だった。まだ、道路案内や駅の表示はハングルだけだった。普通の観光客が日本から来ることを期待していないのは、見え見えだった。80年代外観は日本製そっくりの韓国製カラーテレビが外貨の稼ぎ手になった時、韓国のお役人が、

「外人観光客一人がもたらす利益は、このテレビ11台を輸出した額と同じです」

と口にしたことを、生々しく覚えている。

やっと、訪韓日本人客の3割が女性になったのが、1993年のことだ。今年で正常化50年というが、観光から見る限り、日韓が普通の関係になって、たかだか20年ほどなのだ。過去をお互いが見つめ合うに十分な時が流れたとは、そうしたことからしても、言い切れないのだ。

ところで、韓国の電話番号で、「1330」は何の番号かご存じだろうか。実は韓国内のどこからでも局番なしでつながる無料旅行案内番号だ。24時間、日、英、中国語で応対してくれるのだが、ただの案内ではない。

分かりやすく、日本観光に置き換えると、

「いま、吉祥寺にいます。これから深夜バスで京都の清水寺に行って、それから若狭に行きたいのですが」

と電話口で尋ねれば、吉祥寺からどうやって、どこに行けば一番安い深夜バスに乗れるか、そのバスが京都に着いてから乗る清水寺にいくバスの番号、さらに若狭への行き方、親切な担当者だと、手頃なホテルまで調べてくれる。

こんな案内は日本にあるだろうか。

「赤い制服の歩く観光案内所」も、東京にないサービスだ。ソウルの明洞など、観光客が多いところに必ず、昔のバスの車掌さんのような赤い服を着て、胸から自分が話せる外国語の札をぶら下げて、立っている。近くの地下鉄の駅などへの道案内だけでなく、近所で人気のカルビタンの店も教えてくれる。

キオスクのような「情報センター」もソウルだけで、20カ所以上はある。ここでは、冷えた水で喉も潤すことができる。清渓川沿いの韓国観光公社地下の情報センターでは、必要な情報をプリントまでしてくれる。カウンターのわきで時々、韓国民族衣装の着つけと記念写真サービスをしている。眺めていると、欧米人が盛んに写してもらって、はしゃいでいる。

余談だが、日本の旅では当たり前で、韓国ではお目にかからないものがある。駅弁もその一つだ。知人の韓国の名誉教授は、釜山行と光州行が分かれる大田駅には、駅弁らしいものがあると教えてくれたが、峠の釜めしや富山の鱒寿司のような、工夫をこらし、地域の名産を生かした駅弁には出会ったことはない。

「韓国の鉄道は短いから」

が、名誉教授の見解だが、私は、韓国の食文化に加えて、日本の江戸時代には、東海道膝栗毛や大山詣でなど、庶民の娯楽としての旅で賑わったが、韓国では「さすらい」はあっても、遊行としての旅が盛り上がらなかったからでは、と見ている。

湯治場といえる風景も、韓国の温泉地にはない。こけしのような伝統工芸が見当たらないのも、骨休めの旅がなかったからだろうか。大きく言えば、完全中央集権国家と幕藩体制だった江戸との違いの現れかもしれない。

観光立国・韓国は、ほとんど旅文化ゼロといえる風土から築きあげたものだ。「なせばなる」。その言葉を体現した韓国の観光政策は、十分に学ぶ価値があると思うが、いかがだろうか。

（まえかわ　けいじ）